

今月の豪雨による洪水で大きな被害を受けたボスニア・ヘルツェゴビナで、日本の国際医療ボランティア「AMD A」(岡山市)が29日まで4日間、支援活動を実施した。被災者が160万人に上る中、身体障害者や高齢者に公的支援が行き届かず、看護師の岩本智子さん(30)は自宅や避難先を訪ねて健康状態を調査、食料などを手渡した。

「水はある? どんな薬を飲んでるの?」。壁に高さ1・5mほどの浸水の跡が残る北部ドボイのアパート1階。岩本さんはヤニャ・ヨンディッチさん(51)に話しかけ、血圧を測

継続的な支援が必要

り始めた。

ヤニャさんは病気で左足の指を切断、腰も痛めて重い荷物が持てず、食料の買い出しにも行けない。夫のネベンコさん(54)も両足が義足だ。岩本さんが夫婦を訪ねたのは26、28の両日。ヤニャさんは「私たちのために日本から来てくれるなんて、うれしい」と喜ぶ。

岩本さんは別のアパート3階にあるナダ・ミレシエビッチさん(89)の避難先も訪問。ミレシエビッチさんは3年間寝たきりで、洪水当時、1

階の自宅にいたが、近所の人助けけ出してくれたという。

ドボイは豪雨と川の氾濫で市街地を中心に浸水。1階が水没した住宅も多く、9人が死亡した。一方、同国全体の死者は計23人。隣国のセルビアやクロアチアを含めると計75人を超えた。

「避難先で『もう生きたくない』と話す高齢者もいる。継続的な支援が必要」と岩本さん。被災して再開できない診療所も多く、首都サラエボの日本大使館は医療機器の供与を検討している。(ドボイ共同)



ネベンコ・ヨンディッチさんの血圧を測る岩本智子さん(右)＝28日、ボスニア・ヘルツェゴビナ北部ドボイ(共同)